
寸断少女キザミ リターンズ

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寸断少女キザミ リターンズ

【Nコード】

N7935F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

キザミとの出会いから三ヶ月。彼らは。

一章

一章 足りない

「思い出した」とキザミがいった。

場所は千舐のアパート、そのリビング兼寝室。

パソコン机の前にふてぶてしく座りながら、マウスをぐりぐりしているキザミ。

モルタリスとの戦いから三ヶ月、彼女はすっかり地上世界に慣れてしまった。千舐が大学にいつている間、暇をもてましている彼女が何をしているのか？ ネットである。

しかも、具合の悪いことにネットゲームときている。

すっかり、廃人プレイに興じており、帰宅した千舐の顔も見ない。ディスプレイを食い入るように見つめている。

パソコン画面で戦っているのは、猫耳戦士。キザミのPCだ。

「思い出した」

「だから、何を」

「私は、尻尾が生えていた」

「ハア？」

ネットゲームのしすぎで、おかしくなったに違いない、そう千舐は確信した。

「耳も、生えていた気がするぞ」

「あるじゃないか、ちゃんと」

キザミの顔の両横にはちゃんと耳が一つつつ。

「違う。猫耳だ」

「んな、馬鹿な」

「私は、人類ではない。猫耳が生えていて何がおかしい？」

「おかしくはないかもだけど……」

「猫耳いいい！」

壊れた。

叫んでいる。

キーボードをぐしゃっと叩く。画面が暗転。

「死んでしまった。経験値ロストだ。どうしてくれる？」

「自分の所為じゃないか……」

「第一の臣下の分際で口答えか？」

ここ最近、《第一の》と云う形容詞を冠して千舐は呼ばれている。ピンポン。

呼び鈴がなった。

何だろう。千舐の中に沸き起こる嫌な予感。

本当に、キザミと初めて会ったときが再演されるような気がする。動けないでいると、ピンポンともう一回。

「ふははは！ 私の勝ちだっ！ 千舐。猫尻尾が届いたのだ！」

椅子を蹴って千舐は立ち上がろうとし、何故か停止。

パソコン画面と玄関を交互に見ている。

顔がゆがんだ。何を迷っているのだろうか？

「千舐。プレイしておけ」

「え？ あっ？」

マウスを渡される。

やおら、キザミは玄関へまっしぐら。

「はいはい。切痕だっ！」

玄関を開けて、宣言するキザミ。

面食らった宅配ドライバーではなく、郵便局員。

「書留です。印鑑かサインを」

「よし。サインだ」

局員からボールペンをひったくる。

汚いミミズののたくったような字を書く。本人は字を書いているつもりだったが、彼女はまだ地上の文字に慣れていなかった。

怪訝な顔の局員がキザミを睥睨する。

「何がおかしい？」

「その 切痕千舐さんではないですよね？」

「勿論だ。私は、アレの主人である」

腰に手をあてて、胸を突き出す。

局員は心底困惑したようで、返答に窮し、顔中をしわしわにした。十秒、彼は考えた。

彼の出した結論は、どうでもいいや、だった。

局員は白の封筒をキザミに渡す。

「何だ？ これは？」

「ありがとうございますー」

関わりたくないのだろっ、局員はさっさと帰ってしまった。

「何だ ？」

封筒を見る。封筒には《親展》と書かれていたが、彼女は読めなかった。

「もしかして、これが、夢の国へのチケットか？」

ワケの解らないことをいう始末。

とりあえず、封筒をぞんざいに引き破く。

中から出てきたのは、数字が書かれた紙切れ一枚。

「？」

キザミは鼻先をゆがめた。

千舐に訊こう。部屋に戻る。

「ごめん。死んだ」

パソコン画面で猫耳娘が死んでいる。その死体の上をモンスターがうろついている。

ポップアップするチャット。『きざみさん。なにやってるんですか？』

すばやく、千舐を椅子から引き剥がす。

『すまん。いま、げぼくにやらせていたのだ』

『げぼく？ きざみさんって 』

ひらがなばかりなのは、まだキザミが漢字を読めないからだ。相手は一緒によくいるプレイヤーらしく彼女の事情を解っているらし

い。外国人とでも説明しているのだろう。

『このげぼく、やくにたたんのだ。まったく、なめなめいがくそときている』

「で、キザミ。何がきたの？」

「ああ。これ」

「ご利用明細。タウンカード　ってこれ、俺のクレカじゃないかっ！　生協で無理やりはいらされたけど、使ってないぞっ！」

千舐は深呼吸しながら、明細を読む。

1000円	ガムポ	2008	2	20
1500円	ガムポ	2008	2	27
3000円	ガムポ	2008	3	07

「ガムポってなんだ……」

「ガムポは運営会社だ」

しれっというキザミ。

「待て。おまえ、勝手にクレカ使ったのか？」

「使わないと、買えない武器があるのだ。文面が読めないから苦労した」

「苦労したじゃねーよ！」

「私は、この世界の支配者になるのだっ！　ネットは広大だっ！」

ついこの前、皇位を捨てた人物とは思いがたい。

ネット中毒とはかくもおそろしいものなのか。

暇つぶしに、ネットゲームなんて進めるんじゃなかったと千舐は後悔した。

基本料無料だから、お金はかからないと思っていたのにっ！

きわめつけに、地味に使用する金額がアップしている。

「ところで、キザミさま」

「別に、さまは要らないが」

「はいはい。クレカが何か解ってますかねえ？」

ジト目で見える。

「知らん」

「これ、お金が引き落とされるんですけどねえ？」

「引き落とす？ 空から降ってくるのか？」

「もついい」

頭が痛い。

地下に帰れない今、キザミの居場所は千舐のアパートしかないのだから、追い出せない。追い出せないのに、彼女は大食女だし、エングル係数がやばい。

加えて、ネットゲームだと？

バイトをしていない千舐には重荷以外の何様でもない。

千舐はキレた。

光ケーブルを引っこ抜く。

「なんだっ！ サバ落ちかつ！」

「地下人がサバ落ちとかいってんじゃねーよ！」

「お主だつて、地下人の血が流れているんだぞ」

「俺は地上生まれの地上人だっ！」

「DBのパクリは如何かと思うぞ」

「DB知ってる地下人も如何かと思うぞっ！」

「だから、お主にも地下人の血が」

「ええいっ！」

「ぬわっ！」キザミが素っ頓狂な声をあげた。「光ケーブルが抜けるではないかつ！ 何処のネズミだ？ サイバーテロかつ！ 私の廃人プレイに戦慄を抱いた^{いだ}トップランカーだなっ！」

きよろきよろと狭い六畳間を見回す。

正直、おまえの発言に戦慄すると千舐は思ったが口には出さなかった。

キザミが、かがみ込む。

ケーブルをさし直す。

IEを起動。

「お主」

「なんだ？」

「今、何、IEなんて使ってんの？　とか思ってただろう？」

「　いや……意味が解らない……」

マウスをぐりぐりしてから、千舐はタイプする。

楽天、と。

「楽天？」

「そうだ。楽天だ。私は、この字は読める」

またしても、イヤな予感。

「猫耳コスプレセット、これだな多分」

「待ていつ！」

キザミが懷からクレジットカードを取り出したので、奪つ。一体、何時の間にくすねたのか。手癖の悪い元皇太女だ。

「あまいぞ。千舐。私は番号など暗記しているのだっ！」

勝ち誇ったように笑って、ポチっとな　。

『注文受理』の文字。

「うわあああああ」

「うるさい」

「いくらすんだよ、それっ」

「ざっと一万五千元」

「ふざけんな。今月で赤字だ。家賃が払えないっ！」

千舐は頭を抱えて、くず折れた。膝をフローリングにつける。

「バイト、とやらをすればいい」

「おまえがやれっ！」

「私は、忙しい。今週中に三次職になるのだ」

「……待てよ？」

千舐はクレカの明細に目を落とす。

カード番号を覚えているくらいなのだ。たった三回しか使っていないはずがないではないか。

明細にはびつしりガムポと書かれていた。

計十四件。合計金額三万八千元。

赤字どころの話ではない。破産レベルである。

千舐は気が遠くなりそうだった。

二章

二章 アルバイト

「そうですか」とサバキはうなづいた。

千舐はサバキの働くファミレスにきていた。

千舐は急遽、お金が必要な旨を伝えた。

「そうですね。ディシャップは難しいかもしれませんが……」

「ディシャップ？」

「dish upです。ようするに、ホール仕事ですね。オーダーとつたり、品を運んだり」

「じゃあ、キッチンで……」

「キッチンはそうですね。体力勝負ですから、大丈夫かもしれませんね」

「調理経験とかは？」

サバキは笑った。「そんなの要りません。だって、ボンカレーですから。カレー」

「ええええ」

「常識ですよ。コーヒーは、業務用インスタントコーヒーでして、利潤の多い商品の一つですね。水なんて水道水ですから、一杯十円もかかってません」

千舐は一步後ろに下がった。

「どうして、さがりますか？」

「いやだって。そんな」

「あんまりですか？」

こくこくとうなづく。

「ですけど、飲食業界とか食品業界の常識は、世間の非常識といえますか」

「だから、食品偽装が……」

「あはは。そうですよ。あんなものは氷山の一角でしてね。居酒屋とか酷いものですよ。集団食中毒だけに気をつけていて、個人の食中毒なんて眼中にありません。アルコールの所為かもしれないと、思っちゃうんですね。ふつう」

サバキの口から語られる恐るべき飲食業界の真実。

「もう外食できない……」

「個人経営のほうがいいですよ」としれつとして、サバキは言った。

「ところで キッチンやりますか？ 時給800円ですけど」

「安くないですか？」

「私は1500円貰ってますけど」

「高くないですか？」

「この前の強盗騒ぎで、店長に信頼されましてね。今、新しく開店する直営店の店長にならないかと言われているんですよ」

ひそかに地上で成功しつつあるサバキである。

我が家の姫様は完全にダメ人間になってます、と思う千舐。

「800円でもやらなきゃ……」

「でも、そんなにシフトあいてないですよ。世は不景気でして、飲食業界は市場は縮んでいますから」

「ええええ。じゃあ、どうすれば……」

「ブラック企業にしましょう」

さらっと凄いことを言う。

「ブラックって……もっと割が悪いんじゃない……」

「そういう意味のブラックじゃありませんよ。仕事内容がブラックな そう、俺俺詐欺のような」

「待ってください。サバキさん。そんなところにコネがあるんですか？」

「ありますよ。俺俺詐欺じゃないですけど」

「えっと」

千舐は迷う。

迷う彼にサバキの追い討ちがかかった。

「時給換算3000円ですよ！」

「乗ったっ！」

二もなく承諾する千舐だった。背に腹は変えられないのである。

「それでは、新人を紹介する。切痕千舐くんだ」

背の高い男が言った。

千舐はそうそうに帰りたいと思っていた。

なぜなら、仕事内容があんまりだったからだ。

街頭で女の子をナンパすること。

その理由はごによごによ。

「なかなか、イケメンじゃないか。千舐くん」と別の男がいった。

「きみならきつと釣れる」

女の子を釣る、なんて表現する人たちが普通であるはずがない。

というか、サバキさんはなぜこんな企業を知っていたのか。疑問はつきない。

「そういえば、サバキの紹介ってことは、千舐くんも地下人？」

「いいえ……。血は入っているらしいですけどね」

「そうかそうか。じゃあ、種ナシマジックもできるなっ！ 寸断マジック！」

「ちよつと……それは……」

この企業、色々手広くやっている模様。

「そいえば、」と千舐は話題を切り替える。「地下人って結構、地上にいるんですね」

「ん。そうだねえ。帝国と反乱軍の戦いが長かったからね。難民も多いのさ。なんでも結局、キザミ殿下が継承権を放棄したとかで、帝国は皇家おつけがかわっただけだったりするけどねえ。なんだろうねえ、地上でいえばクロムウエルの革命くらい意味が解らないかも」

「大変ですね……。クロムウエルですか……。でも、戦火は去ったのですよね？ 地下には帰らないのです？」

「地上に慣れちゃってね」

凄く地上に慣れた、というか、イヤな慣れ方をしたキザミを思い出す。そういえば、皇女だったんだよねあ、アレ。

「えっと」

「ああ、俺の名前はオービチエ。よろしく」

「はい」

「そうそう、千舐くん。殿下の所在を知ってたりしないかい？」

「え？」千舐はびっくりした。

「サバキは元々皇族の親衛組織の人間なんだよねあ。でも、知らないという」

「知ってるわけじゃないですか。俺は地下なんていったことないし」

「そうだよなあ。それに、俺がどの陣営の人間かわからないしなあ」
ぎくりとする千舐。

額を汗が伝いそうになった。

「まあ、安心するといい。もう、刺客はこないだろうさ。それに俺らの社長はサバキの知り合いだ。じゃないと、きみに仕事なんか与えないだろう？」

どうやら、からかっていたようだ。

むっとしつつも千舐は「はい」と答えた。

「じゃあ、行くか。釣りに」

釣りってというのは止めて欲しいと思った。

三章

三章

山手線の各駅はオービチエ曰く釣堀であるそうだ。

まあ、もうこの彼の形容、比喻の仕方には文句は言うまい。

「お嬢さん」「お嬢さん」と道行く女性に向かって彼は一心に声をかけている。

「お嬢さんつてのはセクハラになるらしいですよ」とそこはかとなく注意する。

「じゃあ、お姉さんつて言えと？ 俺は三十路オーバーにお姉さんと言えるほど人間が出来ちゃいない」

如何見てもオービチエは三十台なのだが。人のことが果たして言えるのかと。

そして、千舐基準で言えば、お姉さんよりもお嬢さんの方が言いづらい。

「それにだ。お嬢さんと言われて喜ばないおばさんはいないぞ」とか言う始末である。三十路超えにお嬢さんと声を掛けるのは問題ないのだろうか？ 基準が意味不明である。

「ほら、おまえも釣り針を垂らせ」

「……はい」

もうヤケクソだった。ギャルだろうが熟女だろうが、構わない。

声をかけまくった。

すると、見覚えのある後姿が遠くにあった。

長い銀髪に、この前擲擲士が買ったワンピースを着ている。眼を

オクルス

取り外した為、眼帯を片目になっている。

間違いない、キザミだ。

彼女は坂道を登っている。

一人ではなく、彼女の周りには数名の人物。なにやらやり取りを

している。談笑している。どついている。

一体何事だろう？ ネットゲームのし過ぎでヒッキーになっているのではなかったか。

彼女には自分とサバキ以外に地上に知り合いがいたのだろうか？

むう、謎だ。

謎だし、ちよつと嫉妬する。

考え込んだ千舐にオービチエが言う。「おいおい、どうした」

「えっと」

「ん？」オービチエは千舐の視線の先を追う。

「お、中々美人じゃないか。でも、反対車線だなあ」

都会の通りは車も多い。

信号無視して渡れるほど甘くない。

「はあ……」

「知り合いか？」

「いえ……」

「そうか」

夕方まで声をかけた結果、釣果は二名。

事務所に戻る。

「まあ、初日にしては上々か」と言われて、千舐は給与袋を受け取った。

万札が二枚入っていた。

ただ女の子を釣るだけにしてはおいしすぎないか？ と思い、そのような顔を見ると、社長は言った。「明日からは、収録にも参加してもらうからね」と。

やはり、上手い話には罠しかないのだった。

千舐が家に帰っても、家はがらんとしていてキザミの姿はなかった。パソコンも電源が落ちていた。

七時を回っても帰ってこない。少々、心配になってきた。ケータイの一つでも持たせておけばよかったとさえ思った。

九時になっても帰ってこない。

千舐は家を出た。探すあてはなかったが、じつとしてはいらなかった。

キザミは少々酔っていた。

ふらふらと千鳥足をしながら、駅のホームを歩いていた。

電車を待つ人々にぶつかりながら、つい、黄色い線の外側に

彼女の脇を歩いていた人物が、手を引いた。背の高い、ひよろつとした男。

「キザミさん、危ない」

「おっと、すまぬ」

「飲みすぎですよ、多分」

「そんなことはないぞ。私は自分の許容量と云うものを理解している」

偉そうにふんぞりかえろうとして、つんのめる。

のっぽの男が腰を支える。「そうですかね……」

「そうだ。そうなのだ。私がそう、と言ったらそうなのだ」

「キザミさん、あれですよね」

「あれ？」

「オンもオフも変わらないなあって。その態度とかが」

「不満か？」

「いえ。そんなことないですけど」

「お主こそ、なんかキャラというヤツが違うぞ。いやに腰が低い」

「ははは」と男は苦笑い。

「いや、しかし なぜ付いて来る？」

男がはつと両目を見開いた。「だから、酔ってると思って」

「酔ってないぞ」

「強情ですね……」

「んあ？」

「どうしました？」

「いやなんだ　見慣れた顔が向こう側に……」

駅の反対側のホームをキザミは指し示した。

千舐が立っていた。

彼は手を振っている。キザミも振り返す。

「キザミー！」

「出迎え、ご苦労っー！」

「知り合いですか？」

「下僕だ」

「え？」

「いや、あ。そうだな。今は寵臣と呼んでやってもいいぞ」

「はあ……」

千舐がキザミ側のホームにやってきた。

「おうおう。丁度、困っていたんだ」

「何が？」

「ちよつと酔っつていてな」

「キザミさん、さっきは酔っつてないと……」

「口に栓」言うや、キザミはノツポの口を塞いだ。

「では、イナゴ。私はここから千舐と帰る」

「はあ……」

「すまなかつたな。では、帰るか」

ノツポを取り残して、さつさとホームの階段を降りていく二人。

「いいの？　あの人」

「よい、よい。お主の家は駅から遠いではないか。そこまでさせるのは苦しいと云うモノだ」

「そう」

「ところで、お主。如何して午後おらんかったのだ？　授業はないはずだろう」

「バイトだよ。バイト！」

半分、叫ぶように言う。

「ほう。ワーカホリックと云うヤツか」

「何処でそんな言葉を……。と云うか、おまえの所為だぞ」

「知らんっ！」キザミは両耳を両手で塞ぐ。完全に聞か猿のフォーム。

「で、あの人、地下の人？」

「いや、違う。オフ会と云うヤツで会った。イナゴと云う」

「すごい名前だね……」

「プレイヤーネームとかハンドルネームってヤツだぞ。本名ではない」

「さすが、廃人プレイヤー。　って痛い、耳引つ張らないで！」

「ふん」と息を吐き、キザミは手を離す。

「心配したんだぞ。帰っても、いないから」

「てつきり、新しい女でも見つけてイイコトしてたのかと思っただぞ」

なにやら少し怒っている模様。

「褒めて遣わす。私の為に身を粉にして馬車馬の如く、働くといい」

「うわぁ……。心配して損した」

「私も懸念して損したわ」

つつく

四章

四章

誰かに責任を転嫁することで、誰かが救われるのならば、それは必要悪ではないだろうか？

いやいや、そもそも責任を被った時点で、その人間は悪となるのではないか？

悪は滅ばさねばならない。

悪、必要悪と、悪の違いは？

些細なことだ。悪は即時切り捨てるべきもので、必要悪は好きなときにパージできる存在のことだ。

なんと、都合の良い。

世の中と云うのは、誰かの都合で出来ているのだとは思わないか？ おこがましい。そんな価値観は偽りだ。

じゃあ、何だと云う？

皆の都合で出来ている。多数の総意から外れたものが悪なのだ。宗教的な要因、倫理観念と云うことは無視するのか？ それでいいのか？

いいのだ。そんなものは正当化の為の方便でしかない。些末だよ。実に些末だ。何時だって更新できる後付設定だ。

に、しては 倫理観と云うのは堅牢なように。

まあ、それを切り崩すのも役目ではないか。既に 一つ、崩したではないか？

そうだ。神聖不可侵を犯した。

そして、更新した。

何。目的が更新できるのだ。手段が更新できない道理はあるまい？ では、決^{けつ}を採^とろう。

賢明な判断を。

賢明な判断をッ！

「テレクラと云うのを識^しっているか？」とキザミが言った。

千舐は識らないフリをした。「識らないなあ、識らないなあ、識らないなあ」

「テレフォンクラックなら、如何だ？」

「は？」

「テレフォン、電話」

「いやそれは解る、解るんだけど……」

「ふん。役立たず」

「意味が解らない」

「じゃあ、最初から言い直す。ハッキングだ」

むしろ、テレフォンクラックなら盗聴とかが正しいような……。

「いやいやいや。うち光ファイバーだし」

ムッとキザミは不機嫌そうな顔をした。「うるさい。黙るが良い。

お主には音響カプラがお似合いだ」

最近とんとキザミの言っていることが解らない千舐である。音響カプラってなんぞ？

こほんとキザミは咳払いをした。

「まあ、それは良いのだ。良いのだ。重要なことなので二回言いたぞ」

すっかりネットに毒されている。

ネットスラングに毒され過ぎて、ちょっとアレだ。いや、結構アレだ。

元から口を開かなければ云々（うんぬん）と云った感じだったが、最近そのレベルに拍車がかかっている。

「で？」

「今日、猫耳が届いたのだ」

「ふむ……。つまり？」

「やらないか？」

「だが、断る」

沈黙があつた。

先にキザミが沈黙を破つた。「そうか……。私は残念だ。最近、ご無沙汰だつたではないか。偶たまにはいいではないか」

見るからにしょげていた。

もとい、千舐には彼女が何を要求しているのか解っていなかった。そこで、訊ねた。「何の話？」

「イメクラプレイ」

「キザミ様」

「ん？」

「さっきのテレクラって、言い間違えましたね？」にんまり笑つて、千舐は言う。

ツツとキザミの柳眉が攣つり上がった。凶星だつたのだろう。「もういい。もういい。もうしない」

駄々っ子みたいだつた。

ぶんぶん両手を振る。

千舐はキザミの両肩を掴むと、引き寄せた。唇を合わせて、舌を入れた。

キザミの片目が見開かれた。

「むあッ！」

問答無用で舌を使って相手の舌先から側面にかけてを舐ねつては絡ませ、絡ませては舐もてあそり、弄もてあそぶ。息苦しくなったのか、キザミが暴れたところでやめた。

「な、何をする！」顔が薄あかっすら紅くなっている。千舐の両手を振り払つて後退した。

警戒心を露あらわにする子猫みたいにベッド隅によって、上目遣いにみてる。

「うつ……。上手いではないかッ！ 上手いではないかッ！」

重要なことなのだろう。キザミは二回言った。

「舐めテクの応用かな？」

「相変わらず、なめなめしい……」

まんざらではないようだった。地下人的には、なめなめしいが褒め言葉であることなどつくに熟知している。

「じゃあ、やりましょう」

「待て。心の準備が」

慣れた手つきでキザミの上着を脱がす。抵抗しようとも無駄だ。

千舐の脱がせテクも舐めテク同様、天性のものがあつた。続いて、彼女の右腕を外す。間接が外れた音がして、腕がとれた。

すかさず、腕のあつた場所　紅い肉が見えている面に顔を寄せた。

「待て、待てと言って」

なめなめなめ……。なめなめなめ……。

アドレナリンが分泌されていく。

快樂神経がマックスになっていく。

頭の中がホワイトアウトしそうだ。

「う……うみゅう……」

何だか今までに聞いたこともない声をキザミがあげた。

どうせ、また、どこぞのアニメキャラの真似でもしているのだから。

う。千舐は一切関せず、そのまま肩の断面を舐め続けた。

舌から伝わる彼女の味は、形容しがたいものであつた。

極上であつた。

頭がクリアになったと思ったら、既に果てた後だった。

* つづく *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7935f/>

寸断少女キザミ リターンズ

2010年10月25日08時10分発行